
幽霊と人魂



秋山さと子

墓地に囲まれ、寺の境内に住んで五十余年、残念ながら、いまだに幽霊を見たことがない。しかし、考えてみると日本の幽霊は、人知れず旅先で死んで誰にも葬ってもらえなかったり、恨みをもったまま、いつまでも安住の地を得られない亡者たちのことで、寺には無縁塚もあり、いつもお経があげられているから、幽霊が出る余地がないのかもしれない。

『聊齋志異』などによると、中国の幽霊はなかなか優雅で、縁談をとりもったり、楽器を弾いたりする。菊や牡丹などの植物の精や、狐やすっぽんなどの動物の精、仙女、神女などもいて、生

きている人にとりついて悪いこともするけれど、恩返しもするし、人情味があつて、こんな幽霊なら、一度出合ってみたいような気がする。寺に育つたりすると、妖怪のようなものはあまりこわくなくて、夜間に墓地を歩いても、別に淋しいとも思わないけれど、この頃では、幽鬼や亡者たちよりも、かえって生きている人たちが理由もなく乱暴をしたり、人を傷つけたりするので、そのほうがずっとこわい。

幽霊は見たことがないけれど、いわゆる人魂は、小さい時にごうも見たことがあるような気がする。しかし、それもあんまりこ

わい感じではなくて、ただ、不思議なものを見たという思いが強
い。多分、五、六歳頃のことだったと思う。寺を囲んでいる墓地
は、いつも私のよい遊び場で、家に客人があつてなかなか夕食の
仕度ができないような時には、いつまでも石塔の間を駆けまわつ
て時を過ぎたものだった。いくらか雨模様のある夕方、服が濡れ
て寒くなってきたので、家に入ろうと裏木戸のところまでく
ると、墓地の上に青白く光る丸いものが浮かんでいた。お月様にし
ては低く、二メートル位先に浮かんでいるような感じだった。な
んだらうと思つて目を凝らすと、つ、つと動いて、少し尾を
ひいたように見えた。なんだかわからないけれども気味の悪い感
じで、あわてて家に入つて、その頃は太勢いたじいやや、ねえや
や、書生たちに報告したけれど、皆、「ああ、そりゃ人魂だよ」
と言つて、笑つてとりあつてくれなかつた。しかし、その頃か
ら、埋葬されたばかりの新亡の墓には燐がもえるとか、幽霊や人
魂が生きている人にとりつく話などを聞かされて、いくらか、お
化けがこわくなつたような気がする。

当時は、浅草に花屋敷という子どもの遊園地があつて、メリー
ゴーランドや、人形芝居の小屋があつたりした。そして夏になる
と、よくお化け大会をやつていた。人形芝居では、たしか、杜子
春の話で、地獄の光景を見たように思うけれども、どういふわけ

か、これがちつともこわくなくて、むしろおかしかつた。両国の
国技館でも、夏のお化け屋敷や、秋の菊人形の催しがあつたよう
に思う。こんな時には、誰よりも仲の良かったじいや、といつて
も、本当はまだ年が若くて、じいや代りに墓地の雑用などをして
くれていた青年であるが、そのじいやが連れていつてくれた。
『壇の浦の舟幽霊』などという題がついていて、お坊さんがお袈
裟をかけてお経を読んでいる。やがて、どろどろと、低い太鼓の
音がして、「さあ、出るぞ！」という時になると、じいやが、「き
やうつ、こわい。早く逃げよう」といって、私をおぶつてさつさ
と先に進んでしまうので、実は、こういう作りものの幽霊もあま
り見たことがない。しかし、その頃はまだ、人の背中におぶさつ
ても、そんな不自然ではない年齢であつたのに、断片的とはい
え、よくこんなことまで覚えているものと思う。他のことはもう
すっかり忘れてしまつてしまつているけれど、子どもにとつて、お化けの
イメージ、私にとつてはまだ見たことのないお化けのイメージで
はあるけれど、お化けや、少くともお化け屋敷のイメージは、強
烈なものがあるのだから。ちょうど菊人形の展示のように、舞台
のようになつていて、ろうそくの光りでお坊さんの姿だけが浮き
あがつて見え、全体に夏の宵のように濃紺の、おそらく布かなに
かで作られている海が揺れていた。波がしらがちらちらと光つ

て、そこから何が出てくるのか、今でもその時の、見たかったような、見なくてよかったような期待と不安をはらんだ気持を忘れることができない。

幽霊はともかくとして、人魂のほうはずいぶん見た覚えのある人が多いらしい。東京の下町に育った私の母は、まだ娘の頃にやはり、ごみごみと商家の立並ぶ軒先のすぐ上に、青白く丸い光るものを見たという。月かと思っていると、それがすーっと動いたので、あわてて傍にいた祖母に教えたが、二人がふり返って眺めた時には、もうその光りは消えていたそうである。今なら、UFOを見た体験のうちに入るかもしれない。しかし、翌日その近くで、人が死んだ話を聞いたそうである。

日本では一般に、死者の霊はタマとよばれ、それは人間の身体に住んで生命と力を授けるだけではなく、たとえば、木に住むものはコダマ、ある種の音や言葉に住むものはコトダマといつて、特別の呪力をもつものと考えられていた。しかし、それが住んでる器から一度逃げだしてしまふと、もう捕えることができなくて、その人間や木や、音さえも生気を失ない、枯死してしまう。

たとえば、古代では、タマシヅメやタマフリの儀礼などがあり、病人の身体からタマが離れてさまよい出すのを防いだり、あまりよく働かないタマを、タマが住んでいると信じられているものを揺すったり、振ったりして、その力をかき立て、人間に乗り移らせるようにしたのである。

日本の幽霊は、白装束や、足のない形であらわれることが多いけれど、時には、本当にタマ、つまり円形であらわれることもあるようで、ある行者によれば、人間の形であらわれるのは、まだ怨念のこもった幽霊であつて、救いに近づくと、輝やく球体に近くなるという。また、生きているうちにも、いわゆる外在する魂——アルテア・アニマ——として、普通は認識不可能であるけれども、なにかの折に見ることができるとも考えられている。

『日本書紀』には、大國主命が海上をただよつてきた自分自身の魂と対話し、それが彼のさまよえる霊であつて、福運であることを知つたという有名な話がある。

こうなると、幽霊の話もだんだんユングの元型論に近くなる。たとえば、中国に女の幽霊の話が多いのも、たいていは勉強ばか

りしている学者の卵たちが書き記したもので、男性の心の中で抑圧されている女らしき、つまりユングのいうアニマのイメージが、日頃、ちっともかまってもらえないことを恨みに思っており、わたられたのかもしれない。面白いことに、これらの幽霊は、あんまりこわがらないで、楽しく対話を交すと、そんなに悪いことはないで、かえっていろいろと役に立ってくれるようである。さらに、人間の形から進んで、もっと奥深いところから出てくるように思えるものは、円形、または球体であられるというのも、ユングのいう心の奥底にあって、意識も無意識も含めた心全体であり、そのバランスをとる役割ももっているというセルフと、そのイメージであるマンダラの図形に似ているような気がする。ユングはこのようなイメージがあらわれた時には、うまくそれと対話をかわすことで、危機的な状態から逃れたり、また、自分の人格を掘り下げることができると考えていた。

娘時代の母が見た人魂も、子どもの頃に私が見たものも、なにかそんな意味を持つ自分自身の心理的なものの投影であったと考えてもよいのかもしれない。そう考えると、幽霊も人魂も、心理的錯覚のせいになってしまっただけかもしれないが、しかし、一方では、そのようなイメージが、未開部族を含めて、世界のあらゆるところで見られるという事実は、形もなにもないように思われている

魂の实在の証明のようでもある。たとえば、私の祖母は、やはり娘の頃に親類のものが危篤だというので、いそいでその家にかけてようとした時に、川端で渡船を待っていたら、光り輝やく球体が、向うからふわとやってきて、目の前でふっと消えたという。やっと川を渡ってその家に着いた時には、もうその人は死んでいて間に合わなかったそうである。こんな話を聞くと、どうも私たちの心の中には、幽霊や人魂がほんとうに住んでいて、なにかの時には抜け出して、目に見えることもあると考えたほうが面白いような気がする。

幽霊や人魂が川や海などの水辺にあらわれることが多いのも、ユング心理学で、水は無意識の象徴であると考えていることと関係があるかもしれない。人間の魂というものが、ほんとうはどこにあるものか知らないけれど、その物理的な証明はともかくとして、女性や妖怪や輝やくタマのような形をとって、心の中でうろろうしながら出口を探しているのかなと思うと、楽しくなってくる。